2021 アートマイル国際協働学習プロジェクト 報告書

日本学校名 [宮城県富谷高等学校] 担当教諭名[八島 美央] (ECC 国際部 10名)
相手国・地域[インドネシア]
海外学校名 [SMA Negeri 21 Kabupaten Tangerang] 担当教諭名[Febby Anggraeni]

■実施教科・時間数について教えてください。

アートマイルに関連した実施教科・時間数	教　科	単　元　名	時間数
	部活動	ECC国際部	45

■作品に込めた想いについて教えてください。

題（テーマ）	SDGs№14「海の豊かさを守ろう」 持続可能な世界を目指していく中で，海に囲まれたインドネシアと日本はその環境と水産業を守ることは切実な問題である。富谷市は海から近くはないが，津波や原発事故など多くの犠牲を払った震災から10年を迎え，宮城に生きる高校生として，「海」と共に生きることについて学び直したいという想いをこめた。
メッセージ （相手と想いを合わせて世界に発信したいメッセージ）	・私たちは海と共に生きていること。 ・震災による津波の被害を忘れてはいけないこと。 ・海は、家族で訪れる場であったり，誰もが思い出をもっていたり，日本人にとても愛されているということ。 ・寿司や刺身に代表されるように、日本人は魚や海産物が大好きであるが、それらには漁師や漁業に携わる人達の想いが込められていること。 ・私たちの住む宮城県では、魚や海産物の養殖も大事な産業の 1 つであること。 ・養殖された魚は、海との共存を目指す気持ちを持った人達によって、心を込めて ・丁寧に育てられているからとても美味しいということ。 ・海を取り巻く問題や課題はたくさんあるが、それらを解決するために、私たちの住む宮城県でも様々な取り組みに力を入れていること。 ・みんなに愛される海をきれいに保つことを私たちは心がけていること。 ・日本のプラスチックの再利用の方法はとても進んでいるということ。 ・問題を解決するには、問題の背景にある事実などの知識を深めることが大切であること。 ・人の手で、海や河川を汚すこともできるが、人の手でこそ守ることもできるということ。 ・どんなに小さなアクションでも、自分で考えて行動をすることが問題解決につながるということ。

■今回の取り組みの成果と課題はどういった点でしょうか？

成　　果	課　　題
・昨年度の課題として持っていた新入生のプロジェクトへの加入については，昨年度経験をした2名の3年生が今年も継続してくれたので，アートマイルの楽しさなどを校内で伝えてくれたため，1年生8名の参加者を確保できた。昨年度成長してくれた3年生がプロジェクトを先導して始動してくれたこと，また，1年生がその姿を見ていたことは大きな成果である。	・本校は，このプロジェクトに部活動で参加しているため，今年度のように県全体での部活動の活動制限がかかると，プロジェクトが進行しない可能性があることが課題である。活動できない期間に生徒各自が持っているスマートフォンなどにフォーラムの画像や映像データを送信することは技術的には可能だが，受け取る生徒の通信料の問題もあり難しい。

■アートマイルに取り組む前と比べて相手の国・地域や世界に対して意識はどう変わりましたか？

児童生徒の意識の変化	教師の意識の変化
・海に面していない富谷の生徒達が，海をテーマに学習するうちに，自分達の地域を「富谷市」から「宮城県」，「日本」そして「世界」に広げる目を持つようになった。『世界の諸問題を自分事に』できるかどうかは，持続可能な世界のために最も大事なことであるが，今回のプロジェクトに参加する中でその素地のようなものを身につけていったように感じられたことは，とても大きな成果である。	・問題を問題とするかしないか，世界の問題を自分事とできるかできないか，普段から自分が大事にして生徒達にも伝えてきたことである。しかし今回，本校から物理的に遠い場所にある「海」を共通テーマとすることになり，当初は教師自身が及び腰になってしまった。しかし，事務局の皆さんからのご助言を得て，また，生徒達がプロジェクトを進めながら変化をしていく様子を見て，私自身が『自分事』の意味について，改めて考えることができた。

■主な活動の流れを教えてください。

場面	時期	活　動　内　容	児童生徒の反応	実施教科等
出会い 自己紹介	6月 ～ 8月	・メンバー紹介として，集合写真，個人写真、個人セルフビデオを作成してフォーラムに載せた。 ・「富谷高校生の学校生活」をパワーポイントにまとめ，フォーラムに載せた。 ・言語，衣装，民族，自然，著名人などを，インドネシアと日本の比較文化的な観点で調べてパワーポイントにまとめ，メンバーで共有した。	・相手国からのビデオメッセージが届いた時と，日々の学校生活についてのレポートが届いた時には，パートナー達への関心と文化の違いに興味津々であった。そのため，パートナーへの質問をまとめてフォーラムに載せたが，返答を受け取り共有する中で，プロジェクトへの期待感がますます高くなっていく様子が見て取れた。	部活動8
共有 テーマ学習	8月 ～ 11月	・パートナー校と SDGs№.14「海の豊かさを守ろう」を共通テーマに決定。 ・テーマを深めるために研究すべき内容は何かを考えた。 ・①「宮城にとって海はどんな意味があるか考えてみよう」，②「宮城の海に関わる問題点を探ってみよう」，③「宮城で海が近い町に焦点を当てて調べてみよう」などを課題としてグループに分けて研究した。 ・グループ毎にパワーポイントで発表し合うことで共有した。 ・研究とそこから学んだことなどをパワーポイントにまとめて相手国と共有した。	・パートナー校からの強い要望で，共通テーマを SDGs№.14 としたが，研究を始める上で，本校のある富谷市が海から遠いことから，何を問題視すべきか，検討がつかない様子であった。 ・事務局からのアドバイスや同僚の社会科教員からのヒントにより，私たちの地域を「富谷市」から「宮城県」に広げて改めてテーマを考え直すことにした。それにより，知らなかった問題に気づいたり，視点を変えて発想したりするようになっていった。 ・富谷でなく，宮城でなく，日本人にとって，そして世界中の人にとって，海を発想するようになっていった。	部活動15
融合 メッセージ作成	11月 12月	・互いのテーマ学習を進めていく中で，相手校と本校が描きたいことをそれぞれ出し合って共有した。 ・相手校からは「汚染されている海の状況」，本校からは「震災を忘れない気持ち」と「1 人 1 人が海を守れること」を描きたいことを伝え，お互いに同意をした。	・テーマ学習を経て，「『人の手で海や河川を汚すこともできるが，人の手でこそ海を守ることもできる』こと，『どんなに小さなアクションでも、自分で考えて行動をすることが問題解決につながる』ことを，絵に込めてみんなに伝えたい」という声が，メンバーから共通で出てきた。	部活動10

場面	時期	活　動　内　容	児童生徒の反応	実施教科等
創造 壁画制作	12月 ～ 3月	・壁画の構図や描くものについて話し合った。外側と内側に分けて，外側には津波と汚染された海を描き，内側には，人の手によって守られている美しい海を描くこと，また内側の海を取り囲むように，人々が手を携えている様子を描くことに決めた。 ・1人1人が行動をして，世界中の人と一緒に海を守ることを表現するために，人型を描くことと，色は SDGsの17色にすることに決めた。 ・構図の区切り方やデザインについて，細かい部分を相手国に提案をしながら進めた。 ・相手国が制作を始めた頃に，応援メッセージ動画を作成して送った。	・9月の段階で3年生2名が部活を引退して，8名の1年生のみがこのプロジェクトを続けることになった。先輩が引退した当初は，何をどのように進めるべきか戸惑いがあった。しかし，壁画制作の話合いを進めていく中で，自分達でやり切るしかないという自覚を持つようになり，何を描きたいのかをしっかりと意見を主張するように変わっていった。 ・絵を描く段階の頃には，上手い下手を気にしたり躊躇したりするようなことはなく，楽しんで制作している様子を写真に撮ってフォーラムに載せることが出来ていた。	部活動10
評価 振り返り 自己評価	3月	・コロナ感染拡大防止のために宮城全県で決まったルールのため，2～3月はメンバーが集まる形ではほとんど活動をしなかった。個人毎に振り返りシートを渡して記入してもらう形をとった。 ・3月22日に作品が手元に届いたのでメンバー全員で開封をして集合写真を撮った。	・2月から3月半ばまで，定期考査による部活動の停止期間や高校入試による登校しない期間，また，宮城県での部活動の停止期間が重なったため，プロジェクトメンバーで集まることは出来ず，各自で振り返りシートを記入してもらう形になった。 ・作品が届き開封した時には，相手国からのメッセージカードなども届いてとても喜んでいた。修了証を渡した時には非常に誇らしそうな顔つきであった。 ・昇降口に作品を掲示したので，自分達が取り組んだことが校内で見てもらえることに嬉々としていた。	個人活動 2

■アートマイルでついた力について教えてください。

評価（5:とてもついた　4:ついた　3:どちらともいえない　2:あまりつかなかった　1:つかなかった）

学習目標・つけたい力	評価	教師がそう感じた場面と理由
異文化・自文化を理解する力	4	・インドネシアと日本について，様々なテーマに分けて比較文化の形で調べ学習を行い，またパワーポイントにもまとめる機会を持ったので，比較的ついたと感じている。相手国からも同じような取り組みをしてもらえたら，このプロジェクトの醍醐味になるのではないだろうか。
批判的に思考する力 （客観的・論理的視点）	4	・SDGs№14「海の豊かさを守ろう」を共通テーマにしたことで，当初は海から遠い富谷市では，問題を捉えにくいのではないかという印象であったが，富谷ではなく宮城にある海に関わる問題を俯瞰的に捉えたりする機会を持てたことは評価できると思う。
主体的に考え行動する力	5	・プロジェクトメンバー10名のうち，3年生2名は，9月で引退をする形になったが，残った1年生8名はプロジェクトの進行を遅らせることもなく，いつまでに何をすべきかを考えて行動することができていた。
多様な他者と対話・協働する力 （海外の相手と対話・協働）	2	・日本側からの投げかけに対してインドネシアからのリアクションが少なかった。プロジェクト前半頃の世界的な感染症の流行の時期には工夫をして反応をいただいておりとても感謝をしているが，一方で2～3月は相手国の様子が全く分からなかったことが非常に残念である。
想いを言葉や形にする力 （メッセージ作成・壁画制作）	4	・テーマ学習や研究を丁寧に進めたのでしっかりとした想いを持つことができたため，想いを形にすることもうまく進められた。伝えたいことを壁画の中に込められたと思う。